

---

# Aさんとの会話。

妹明

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

△さんとの会話。

### 【著者名】

妹明

N4899N

### 【あらすじ】

狂った考えの持ち主の△と話せる俺もまた狂っているのかもしれません……。

俺のクラスにAという女子がいる。

そいつは、ちょっと頭が壊れているけど、文武両道で、美人な奴だつた。

最初はスキルの高さから言い寄つてくる男も少なからず存在したのだが、

Aの頭の壊れぶりに失望し、言い寄る男はいなくなつた。

そして、その壊れた考えは友人をも見放させるほどものであつた。  
「そう。僕、人と価値観がズレまくりみたいなの。今となつちゃ、話すのなんて君くらいだよ」

そう言つてAは爆笑した。

本人も認めるほどの異常人と、何故顔を合わせて話しているかつて言つと、理由はない。

出会いも特に変わったこともなく、ポツポツと話していくうちに、こうなつていた。

「そう考えると、こんな変人とうまく付き合える君も、相当な異常だよね」

「俺はお前みたいな狂つた考えに興じたことなんてねえんだけど」

「ははは。僕はそんなに嫌な考えの持ち主かな？」

Aは笑い方も、どことなく普通ではない。ああ、そうだ。ちょうどRPGのラスボスみたいな笑い方だ。

普通の振る舞いをしていても、どことなくぎこちない。それは、俺も同じなのかもしれない。

「当たり前だろ。だつて」

「『両親が死んだ時に葬式場で爆笑なんて出来ない』かい？」

またラスボスの笑いをするA。俺の驚いた表情を満足げに覗いて、話を始める。

「図星かい。あれね。あれは……。流石に両親の死に対して死に顔が面白すぎて笑つたんじゃないよ。事実面白かつたけど」

Aは、いつものようなニヤついた顔ではなくて、どちらかと言えば真つ黒な笑みを浮かべていた。

「僕は、あの二人の葬式で大泣きする周りの人間の反応に笑つたんだ」

Aは髪を指に絡ませながら続きを話し始めた。

「僕はあんないたつた一つの死に対してもよくもまああんなに泣き叫べるなあつと。考えてたら笑いが止まらなくなつたんだ。ツボにはまつたとも言えるだろ?」「う」

Aは思い出し笑いをしたのか、くくつと笑いをこらえた声をだした。

「両親の死を軽く受け止めすぎじゃねえか?」

「そうかもね。僕は目の前で両親を殺した犯人を見ていたわけだし」

「さすがにそれは、初耳だぞ??」

「僕も幼いながらに警察にはちゃんと連絡したんだ。まあ、その日の内に出頭したらしいが」

Aは呆れたような顔をし、はつ。とバカにしたような笑いをひとつくれた。

「僕はね、あの人間と両親が以前から金のトラブルで悶着あつたのを知つてたのさ。そこが原因だと、そいつを見てひと目でわかつたさ。だから、僕は彼に言つたよ。『お疲れさま。楽になるね』ってね」

「は、犯人にか!??」

「ああ。僕と彼は両親は知らなかつたが、彼とは凄く仲が良かつたんだ。遊び仲間としてね。だから、笑顔で見送つてやろうとそう言つてやつたら、奴は怯えた目をして凶器をその場に捨てて逃げ出しだよ」

「バカだろ?」とでもいいたそうな声で、Aはその話を昨日起つたちょっととした面白いことのように話し上げた。

俺はとりあえず、そんな言葉を吐かれるとは思つてなくつて怖くな

つたんじやねえかと、苦笑混じりに答えておいた。

するとAは

「世の中にはな。どんな奴が居たつておかしくないといつのを、彼は学ぶべきだな。そุดだとするならば」

「まるで、知つたような口を利くな。お前は」

「ああ。僕は認めているからね。殺人者も、同性愛好者も、馬鹿も、天才も、超能力者も、幽霊も、僕みたいな。いいや。僕以上に狂つた考え方を持つ人間すら。全てが存在するとね」

「半分答えになつてない気がする」

「僕は、人と会話するのが苦手なのさ。こいつ風な質疑応答が出来ないからね」

「ああ、そう」

俺は、奴を見るのをやめた。Aはふふっと笑い、空を見上げた。

「やつぱり君も、少し変だよ」

俺は今度は、何も答えなかつた。

(後書き)

Aは、誰が誰に何してもいいと、後日語っていた。

僕は、それに興味がない。と。知ったことじゃない。と。

そんなの僕が止める権利も、許す権利もないじゃないか。とね。

俺はとりあえず、そうだな。と答えて飲んでいた紙パックのジュースを飲み干した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4899z/>

---

Aさんとの会話。

2011年12月16日19時00分発行